

情動論的転回をめぐる学際研究：情動の思想史を踏まえた 〈帝国〉の情動装置の系譜学

The “Affective Turn” in the humanities and social sciences : a genealogical study of imperial
affective apparatuses

水嶋 一憲(MIZUSHIMA Kazunori)

21世紀に入り、グローバル化の加速度的な進行の中で政治・経済・文化の領域が複雑に絡まり合いながら、それぞれドラスティックな変容を遂げつつある今日、人文・社会諸科学における「情動論的転回」に大きな注目と関心が寄せられている。情動に焦点を合わせるこのアプローチは、近年唱えられた他の「転回」(言語論的転回や文化論的転回、等々)と同じく、諸種の学問領域で試行されてきた生産的な研究の動きを整理・活性化した上で、今後の探究のための新たな道筋を開こうとするものである。と同時に、情動論的転回は——以前の言語論的転回や文化論的転回とは異なり——、触発し・触発される身体とその情動の諸相に照準することをとおして、従来の社会理論や権力理論のパラダイム転換、またひいては21世紀のグローバル社会における身体・テクノロジー・事物の新たな布置の解明を目指すものである。本研究は、かかる情動論的転回がもつ意義を社会哲学・社会思想的観点から考察するとともに、現在のグローバル資本主義の動向と動態の中で情動が果たすきわめて重要な働きを学際的観点から把握することをその目的とする。

情動論的転回をめぐる学際研究に取り組むさいに、出発点として問わなければならないのは、そもそも情動とは何か、という基礎的な問いであろう。マイケル・ハートは、最近出版された学際的共同研究『情動論的転回』に寄せた序文で、「情動の理論を最大限に推進した哲学者」としてバルフ・デ・スピノザの名前を挙げ、またスピノザの思考が、「この分野の最新の研究のほとんどにとつての直接的ないし間接的なよりどころ」となっている点を指摘している。こうした視座をさらに掘り下げて検討するために、エチエンヌ・バリバルによる画期的なスピノザ論の翻訳を来年度中に刊行する予定である。またすでに本研究組織の研究員は、アントニオ・ネグリの画期的なスピノザ論(『野生のアノマリー』)に関連する、二つの重要な研究論文の翻訳を公表している(『情況』2009年7月別冊号に掲載)。

人文・社会科学における情動論的転回は、産業資本主義から認知資本主義への移行を分析するさいにも、不可欠の分析枠組みを提供するものである。この点に関して、すでに研究員は、〈帝国〉の情動諸装置の主要な一部分としての、ブランドを軸としたグローバル文化産業論の分析に取り組み、その成果の一端を共著に纏めている(斉藤日出治・高増明編、『アジアのメディア文化と社会変容』(斉藤・高増・田間泰子・水嶋一憲ほか5名による共著)、ナカニシヤ出版、2008年。担当箇所は第9章、「〈魂の工場〉のゆくえ：ポストフォーディズムの文化産業論」、164-193頁)。

情動論的転回をめぐるこの学際的研究は、〈帝国〉の情動装置の学際的分析という独自のな方法論を採用しながら、アクチュアルな成果と意義をもたらすことをめざしている。こうした目標に向けて後半の研究では、上記の研究成果を踏まえつつ、研究成果の最終的なとりまとめ作業に取り組んでゆきたい。